あの時の表情

LiN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの時の表情

【Ｎコード】
Ｎ８０３７Ｙ

【作者名】
ＬｉＮ

【あらすじ】
妹の前であの日と同じように・・・

「陽ちゃんって小学校の頃にお漏らししたことがあったよね」
陽ちゃんははっと顔を上げると俯いてしまいました。しかしすぐに問題集に向かい直すと、計算を再開します。
「覚えてる？」
「う、うん」
私は幼い頃からこうやって兄の陽ちゃんと机を並べて勉強し、いろいろなお話をしてきました。私にとって陽ちゃんは大切な存在です。それは慈しんであげたいという感情があるということであり、また、その逆の感情も存在するということでもあります。
「4年生の時だっけ？」
「・・・うん」
解答用紙に向かう陽ちゃん。しかしその顔はほんのりと赤くなっていました。

陽ちゃんが4年生、私が3年生の冬。陽ちゃんは私の前でお漏らしをしました。
私達はほぼ毎日一緒に帰っていました。その日は陽ちゃんは無口で落ち着かない様子でした。私は陽ちゃんがおしっこを我慢していることに気づきました。妹の前でおしっこがしたいなどと言うわけにもいかず、陽ちゃんは何もないかのように表情を作ろうとしていましたが、必死に我慢していることは私の目からも明らかでした。
下校途中には、待ち時間の長い信号がありました。信号待ちの間、じっと耐えているようでしたが、我慢できなくなってしまったのでしょう。足をバッと開いたかと思うと、陽ちゃんのズボンからすごい勢いでおしっこが出てきました。立ったままパシャパシャと盛大にお漏らしをしていました。かなり長い間、陽ちゃんのおしっこが

ズボンから流れ出していました。手で押さえることもできず、足を開いておしっこが全部出てしまうのをただ見ているしかない陽ちゃん。

おしっこがもう出てこなくなってから、私は「もらしちゃった？」とおそるおそる聞きました。陽ちゃんは顔を真っ赤にして、一言も喋らずに家まで早足で帰りました。

そう。あの日と同じです。あの時の陽ちゃんの表情と。

「陽ちゃん」
「・・・なに？」
「時間内に終わりそう？」
「・・・無理かも」
陽ちゃんは何回も座りなおしています。ペンを持った右手は計算式を紙に記していきますが、左手はズボンの前をぎゅっと押さえています。
「やだ！どこさわってんの？」
私は意地悪にも、つい大声を出してしまいました。
陽ちゃんは果敢にも左手を机の上に置きましたが、すぐにまたズボンの前へ下ろしてしまいました。
「春香さんにいいつけるよ。」
その言葉を聞いて陽ちゃんはびくっとしました。
「春香さんが怖い？」
「べつに。」
従姉妹の春香さんは大学生で、私達の家庭教師をしてくれています。学業に秀で、今でも私達に勉強を教えてくれる春香さん。私は彼女のことが大好きでした。そしておそらく陽ちゃんも・・・
「解けてないと怒られるよ。」
「・・・」

「ねえ・・・おしっこ出しちゃったら？」
「いやだ・・・」
「問題が解けてればお漏らししてても怒られないよ。」
「いやだ！」
陽ちゃんは立ち上がって叫びました。
私に浴びせられる強い、強い、陽ちゃんの視線。しかし・・・
「あ、あ、あ――」
陽ちゃんは左手でぐっとズボンの前を押さえます。それでも我慢できないのでしょうか。とうとう両手で押さえ込んでしまいました。
「陽ちゃん」
「見るなぁ・・・」
陽ちゃんのズボンの裾からおしっこが流れ出しました。ズボンの前にもシミができてどんどん大きくなっていきます。しゅーと、大きな音が聞こえます。内股になる陽ちゃんの両脚に、何本も、おしっこの線が浮き出て、お尻にからも滝のようにおしっこが滴り落ちました。液体が床を叩く水音が激しくなり、ズボンはどんどん濡れていきます。床のみずたまりがも広がっていきます。湯気を立てて、ツンとした匂いを上げて、まだまだ広がります。陽ちゃんは震える手でお漏らしの跡を私から隠そうとしています。
「出ちゃった？」
「・・・う・・・うううっ・・・」
「陽ちゃん、かわいそう。我慢できなかったんだね」
「・・・」
「しょうがないよ、さ、頑張って残りを解こう」
「・・・できない」
「春香さんは最後まで解けばきっとお漏らしのことは何も言わないよ？」
「お願い・・・言わないで！」
「ふんだ、私が呼ばなくても春香さんすぐに入ってくるよ」
「言わないで・・・言わないで・・・」

「あまえんぼう。４年生の時も、私にそうやって泣きついたくせに。」
「ううっ・・・ごめん・・・」
「ちょっとやだ！まだ出てるの？」
「ごめん・・・ごめんなさい・・・」
「陽ちゃん・・・」
私は陽ちゃんに手を伸ばそうとした。床に広がったおしっこの中に崩れ落ちそうになる陽ちゃんを、助け起こそうとしました。陽ちゃんは、私ではない両手に、抱きかかえられました。
「春香さん！」
「うん、祥子ちゃん、陽くん、終わったかな？」
「ええ、私は・・・」
「陽くんは？」
「ごめんなさい・・・春香さん・・・ごめんなさい・・・」
「何がごめんなさいなのかな？」
「春姉ちゃん・・・ごめんなさい・・・祥ちゃん・・・ごめんなさい」
「陽くん、立ちなさい。自分で、立ちなさい」
陽ちゃんは促され、おしっこの水溜りの上になんとか一人で立ちます。脚がぷるぷると震えてしまっています。目にはいっぱい涙を溜めています。
「陽くん、泣かない。泣かないでちゃんとこっちを見なさい。祥ちゃんは全部解けたって。陽くんは？」
「解けて・・・ません」
「あらそうなんだ。お漏らししちゃったから解けなかったの？」
「・・・はい・・・」
ついに陽ちゃんは泣きだしてしまいました。
「本番ではお漏らししても誰も助けてくれないよ。ほら、あと少しじゃない。がんばれ」
春香さんは陽ちゃんの肩をぐっと掴み、そのまま椅子に座らせま

した。陽ちゃんのお尻のしたから、ぐちゃっと音がしました。
「ほら、解いてみよう。がんばれ陽くん」
陽ちゃんは、涙で顔をぐちゃぐちゃにして、問題にとりかかりました。

なぜ胸の奥につかえるものがあるのでしょうか。この噛み切れない気持ちは陽ちゃんへの感情であり、また、春香さんへの感情でもあるようですが・・・よくわかりません。この状況をいかなる形であれ乗り切ったのであれば、私は陽ちゃんを抱きしめ、頭を撫でてあげようと考えていたのですが・・・
それは、この感情の正体が分かってからにした方がよさそうです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8037y/

あの時の表情

2011年11月23日21時45分発行